

「やっとホントの顔を見せてくれたね！」

——日本人セックスワーカーに見る肉体・感情・官能をめぐる労働について

田中雅一

<要旨>

本稿の目的は、日本におけるセックスワーク（売春）の性質を、肉体労働、感情労働、官能労働の3つの労働から理解しようとするものである。資料は5人の日本人女性セックスワーカーたちへのインタビューに基づく。セックスワークは、1970年代に作られた言葉で、売春をほかの仕事（ワーク）と同じく合法的な活動（サービス産業）ととらえるべきであるという主張がこめられている。しかし、このような主張には、根強い批判が認められる。

ひとつは、セックスワーカーが人身売買の犠牲者であって、セックスワークを合法化しようとするのは、その犯罪性を隠蔽することになるという主張である。二つ目は、セックスワークは若くて未熟なワーカーが喜ばれ、価値もあるという点で、熟練度が重視される通常の仕事と同じだとみなすべきではないという主張である。最後の批判は、本来私生活に属するセックスを仕事とすることで、ワーカーたちは多大な精神的被害を受けるはずであるため仕事とはいえないという批判である。本稿では、セックスワーカーたちと顧客との親密なやり取りについての語りを分析することで、これらの批判の妥当性を吟味した。

日本のセックスワーカーは、1時間から2時間を単位として顧客と限られた時間を過ごす。彼女たちは、顧客の支払額を増やすためにできるだけ長くいること（延長）を顧客に求め、また収入を安定させるために繰り返し一人の女性を指名する常連を増やそうとする。顧客はワーカーが自分に好意を示し、自分との性行為によってオーガズムに達することを好む。このような顧客の要望に応じるため、ワーカーは「感情労働」を通じて好意があるかのような演技をする。オーガズムについては、あたかも女性を感じているかのようなふりをする「官能労働」が必要となる。

本稿のデータから明らかなのは、どのワーカーも自分を犠牲者だとみなしていないことである（だからといって、日本のセックスワーカー全員が犠牲者ではないとはい

えない)。また、素人が好まれることから、素人のようにふるまう技術を身につける。さらに、顧客の気づかないところで気を遣い、暴力を回避するための交渉を行っている。顧客の要望に応じて、感情労働や官能労働の主体として彼女たちは積極的に顧客と接しているのである。たしかに、セックスを仕事にすることで私生活に影響が出るが、これはむしろ合法化することで解決可能だと考えられる。問題があるから合法化すべきでないというのは本末転倒であろう。

I はじめに——労働としてのセックスワーク

本稿の目的は、日本の女性セックスワーカーたちへのインタビューをもとに、セックスワークにおける男性客との葛藤を分析することで彼女たちの労働の実態に迫り、「仕事としてのセックスワーク」への批判を検討することにある。これまでのセックスワーク研究は、いくつかの例外を除いて当事者の動機やライフ・ストーリー、制度の仕組み、歴史的变化、倫理的問いかけ（セックスワークは悪いのか）等に限られていた。これに対し本稿ではセックスワーク（いわゆる売春、性産業、フーズク）とは文字通り仕事あるいは労働であり、その過程を研究することが何よりも重要であると考え。本稿で扱うセックスワーカー（sex worker、性労働者と訳されるが、本稿では以下ワーカーと省略する。これには売春婦、フーズク嬢、淫売、娼婦、男娼等が含まれる）は全員女性で、射精を伴う性的快楽を男性客に与える仕事に従事している。しかし、射精を誘発する肉体労働という側面だけにセックスワークを限定すると、その理解をたいへん貧しいものにしてしまう。セックスワーク＝肉体労働とみなされていたから、これまでの研究は労働の内容に十分注目してこなかったと考えることもできよう。「性を売る」「からだを売る」「金銭と引き換えにセックスをする」「女体を使ったマスターベーション」といった表現ですませてしまい、微細な描写はフーズク・ライターに任せていたというのが現状であろう。しかし、フーズク・ライターによる描写はあくまで男性側からの視点にすぎない。本稿で注目するのは、そうした描写から抜け落ちるワーカー側の視点である。その際、肉体労働だけでなく、感情労働と官能労働に注目する。

感情労働（emotional labor）は社会学者ホックシールドが『管理される心』[2000(1983)]で提唱した概念である。接客を主とする労働者は一般に、自身の感情表現を管理し（例えば微笑みを絶やさない、配慮の行き届いたしぐさ）、サービスを受ける客に肯定的な感情（安心感）をもたらしたり、否定的な感情（不安や恐怖）を軽減したりする。こうした一連の行為が感情労働である〔ホックシールド 2000:7〕。

ホックシールドは2つの感情労働を区別する。1つは表層演技で、私たちは自分の考えや思いと相反する表情や言葉使いをすることができる。いやな客だと思っていなくても、にこやかに接して、不快な気分させないようにする。これに対し、もう1つの深層演技は、自分自身が本当にそう思い込むように努力する試みである。葬儀屋は葬式で悲しくならな

表1 日本人インタビュー対象者のリスト

名前(仮名)	年齢	職種
マギー	30代	本番系デリ
アミ	30代	本番系デリ
マリ	30代	本番系デリ
サヤ	20代	非本番系デリ
ユリ	30代	非本番系デリ

ければならない。そうならない場合は悲しいで
きごとを思い出して悲しい気分になろうとする。

さて、ホックシールドはその書物の最後に、
現代社会では感情労働のために感情の管理が蔓
延している状況で、本来性を求める志向がま
す強まっていると指摘する。市場に出回る
心は管理されているのが当然ということにな
れば、「管理されない心」は稀少価値を帯び、「管
理されない感情生活を祝福する」ことになる

[ホックシールド 2000:218-20]。後に見るように、セックスワークにおいても管理され
ない（かのように見える）心やからだこそ最高の商品であるということになる。

つぎに官能労働について説明したい。セックスワークの特徴として、男性に性的快楽を
与えるだけでなく、客がワーカーに与えようとする快楽（オーガズム）をめぐるやりとり
も無視できない。本稿ではこうしたやりとりを、客に性的快楽を与える肉体労働と対比さ
せて官能労働（erotic labor）と呼ぶ。それは、セックスワークに固有の労働と考えられる¹。

以下では、セックスワークについての先行研究を検討してセックスワークを仕事とみな
さない3つの批判を吟味した後（第2章）、日本の性産業を紹介し（第3章）、第1次資料
を提示する（第4章）。最後に第2章で提示した3つの批判を考察する（第5章）。

筆者は2009年頃からワーカーと定期的に会い、インタビューを続けてきた。1回のイ
ンタビューは2時間～3時間である。簡単な質問事項以外はほとんど自由に話をしても
らった。今回は今までインタビューに応じてくれた11人の日本人女性のうち、デリヘル
（後述）に携わってきた現役3人、元ワーカー2人、計5人のインタビュー・データ（語
り）を取り上げる（表1）。年齢は20代半ばから30代後半までである。詳細は省くが、
現役ワーカーは月におよそ30万円以上（多い時で80万）稼ぐことを目標にしている。

プライバシー保護のため名前は仮名である。同じ理由からインタビューには日付を入れ
ていないが、断りのない限り2011年6月から12年10月までのものである。また、その
うち3人については複数回にわたってインタビューを行っている。

II セックスワーク研究

1 仕事としてのセックスワーク批判

セックスワークとセックスワーカーという言葉は1978年から使われ始めた²。それは、

1 性的快楽には、男性であれ女性であれなんらかの感情的要素が求められると想定するなら、単純な肉
体労働は存在しないし、官能労働には感情労働が密接に関わっているのも事実であり、区別をしてい
ない研究 [レバー & ドルニック 2004(2000): 144-145] もあるが、ここでは一応分けて考察を進める。

2 キャロル・リーが Women Against Violence in Pornography and Media によって組織されたサンフランシスコで
の会議ではじめて使った言葉である [Leigh 1997]。その意義について詳しくは [田崎編 1997] を参照。なお、
ホックシールドの用法に従うと、emotional work は金銭授与のない対面行為における感情管理を意味する。
この対比を採用するなら、sex work は金銭の授受が伴わない性行為、sex labor は金銭の授受が伴う性行為と
なっており分かりやすいのだが、後者に sex work という言葉を使うことが定着しているので、本稿でもそれに従う。

金銭と引き換えにセックスなどの性的サービスをする人たちを労働者 (worker) として認知すべきであって、性的異常者・逸脱者や家庭に性感染症もたらす「犯罪者」や、家父長制・資本主義の無力な「犠牲者・被搾取者」とみなすべきでないという考えに基づく³。そこには、労働者としてのエイジェンシーをワーカーに認め、彼女たちを取り巻く労働環境を改善し偏見を軽減し、合法化しようとする意図が認められる。

しかし、売春を労働・仕事とみなす立場に対しては根強い批判がある。それらは大きく3つに分かれるが、どれも売春を特殊な仕事である（他の仕事と同じではない、したがって仕事とはいえない）とみなす点で共通する⁴。

批判1) 売春＝犠牲論。まず、ワーカーは家父長社会において搾取される性的な犠牲者であるという考えである。自立した労働者とみなすと、人身売買や女性への暴力など犯罪的要素が隠ぺいされることになる。

批判2) 売春＝仕事以前論。売春には特殊な技能や知識を必要としないから、売春に携わる男女を労働者とみなすのはおかしいという批判である。

批判3) 公私の区別不可論。売春が売商品（サービス）はセックスであるが、セックスこそ私的行為（親密さ）の最たるもののはずである。セックスを人格から切り離すことはできない。したがって、これを公的なもの、すなわち仕事とすることによって生じる矛盾は心やからだを蝕むことになる。このためワーカーたちは私生活でセックスを楽しむことができなくなるというのがその最たる証拠である。批判1とは違う意味で、批判3もワーカー＝犠牲者とみなしていると考えていいだろう。

批判1については、人身売買に関係していたり、非合法ドラッグの常習によって自分で判断することが困難な状況に当事者が置かれていたりする場合に当てはまる。しかし、だからといってすべての売春婦や男娼が強制されているとはいえない。何をもって自発的とみなすのか、あるいは強制的と判断するのかは難しいが、ここでは当事者たちの考えを尊重したい。結論から述べると、本稿で取り上げる事例では、仕事の開始と終了を自由意思で決められる状況にあること、また店と自分の取り分の割合について（正当性はともかく）手にする報酬に納得していることを指摘しておきたい。

批判2については、若くて仕事に慣れていないワーカー、つまり素人が客に好まれる傾向があることも否定できない。しかし、ワーカーたちは、そのような客の思いに応じるために「職人的」努力をしているという点を見逃すべきではない。仕事として続けようとするれば、このような客の理不尽な要望を満たすための技術が必要となり、だれにでもできるというわけではないのである。批判3とも関係するが、こうした若さや素人らしさに価値が出るのは、肉体的な魅力だけではない。ワーカーの素に価値が求められるのである。その1つが「素直な感情表現」であり、もう1つが「素直に感じる性的な身体」である。前者が感情労働、後者が官能労働に関わる。素人は「本当の自分」との乖離が（でき）ない——演技が下手で裏表がない存在と思われるから、これらの労働に失敗しかえって好

3 例えばゼーリッヒ [1962: 80-81] は、ワーカーを生まれつきの犯罪者とか犠牲者とみなしている。

4 これらの批判については、[Chapkis 1997] を参考にした。

まれるのだ。重要なのは、セックスワークはだれにもできると言える側面を持つが、仕事として行おうとすれば客の欲望に応じるための技能、また自らの身体、精神的健康を守るための知識や対処法なども必要となってくることである。本稿では、客が何を求め、ワーカーはそれに対しどのように応じようとしているのか、応じることによってワーカーの何がどのように蝕まれるのかを、インタビュー資料をもとに検討したい。

批判3にはセックスが「愛の営み」だから金銭と引き換えにしていけない、引き換える仕事に就くといつか心身がだめになってしまうという道義的な判断（ロマンティック・ラブ・イデオロギー）が含まれている。逆に、もしワーカーたちがこのイデオロギーから自由なら、こうした批判が想定する心身のバランス問題がある程度克服できるかもしれない。実際のところ、ワーカーはどのように公私の区別を維持しようとしているのだろうか。これに関連して、ワーカーは私的なセックスを楽しめないという指摘もあるが、本当にそうなのかどうかも問われなければならない。セックスワークという仕事は、肉体労働、感情労働、官能労働の3つの様相があると述べたが、これらの3つの労働の過程において、どのような公私に関する境界維持の試みがなされているのか、あるいはなされていないのかが実証的に問われる必要がある⁵。本稿では、肉体労働、感情労働や官能労働に注目しながら上記の批判を吟味していきたい。

2 先行研究について

セックスワークという言葉が定着しているとはいえ、冒頭で触れたように、今日でも仕事・労働の具体的内容を真正面から論じている研究はほとんどない。ワーカーのライフ・ストーリーに注目する研究（主としてインタビューに基づく動機研究）、また性産業の歴史的变化、セックスワークは悪いのかといった倫理的問いかけ等が中心を占めているのである⁶。

II-1の批判3点を吟味するにあたって注目したいのは、具体的には感情労働と官能労働を取り扱うセックスワーク研究である⁷。

ホーチ・ミン市で調査をしたホアンは、ワーカーを3種類に分けている [Hoang 2010, 2011]。まず、貧乏なベトナム人を「床屋」で相手にする底辺層に位置するワーカー（タイプ1）、白人のバックパッカーが集まるバーで客を取るワーカー（タイプ2）、そして欧米で成功して仕事でやって来る裕福なベトナム系アメリカ人と高級ホテルのバーで出会って相手をするワーカー（タイプ3）である。ホアンによると、タイプ2と3において感情労働が認められるが、タイプ1では客とのやりとりは短時間で会話もない。仕事時間は平均20分。男性の性欲はたんたんと機械的に処理されていく。彼女たちの感情労働は、あ

5 直接労働に関係しないが源氏名の使用も、公私の区別を維持する方法といえよう [熊田 2009]。

6 日本人の著作に限ると、動機については援助交際を対象にした [園田 2001]、歴史については [小谷野 2007; 藤目 1997]、売春の是非をめぐっては [江原編 1995] を参照。熊田 [2007] は、主要な人類学的研究をレビューし、職業が犠牲者かという二者択一に当てはまらないワーカーの世界を描くことの重要性を主張している。

7 セックスワークが感情労働を含むという点については、[Chapkis 1997; Kempadoo & Doezema 1998; O'Neill 2001] 等がある。

えていえば好意を示すことより嫌悪を押し殺すことである。タイプ2の女性たちは客と懇意になると贈り物等をもらい、親密さを増そうとする。第3世界のたくましくもけなげな女性をふるまうことで、白人男性を救世主に仕立て上げ、帰国後の送金を約束させる。時に結婚に至って欧米に移住する。タイプ3の女性たちは、経済的に余裕があつて好みの客しか相手にしない。彼女たちの若さや美しさは、エスコートする男性の富の象徴であり、他の男性たちから羨望の目で見られることになる。彼女たちは「感情を商品化し、顧客が公共の場所で男性性を示威することを助ける」のである〔Hoang 2010:267〕。タイプ3の女性たちはすぐに客と寝たり、金をせびったりしない。また自分がセックスワーカーであることを最後まで明らかにしない⁸。

ホアンの研究から明らかになるのは、労働環境だけでなく顧客の地位によっても感情労働の在り方が異なるということである。しかし、彼女の分析はワーカーの属する階級と顧客との対応関係を確認するにとどまっていて、感情労働について当事者たちがどう思っているのか、といった問いについては十分議論されてはいない。また、ここで議論されているのは、客に対する好意的な感情や相互のやりとりを肯定的に記述しているだけであり、そこでワーカーが直面する諸問題——例えば客を好きになることは可能なのか、公私の区別を維持できるのか——について論じてはいない。相手を選ぶことができ、セックスワーカーという身分も明かさないタイプ3と異なり、タイプ1や2において想定される否定的な感情（嫌悪の抑制や忍耐に関わる感情）への言及もない。

サンダーズ〔Sanders 2005〕によると、イギリスのワーカーたちは、演技を通じて仕事用の感情と私生活用の感情を分けるという戦術をとっている。つまり、感情労働はたんに顧客との親密な関係を構築するためにだけでなく、私的生活とワーカーとしての公的生活との境界を維持し、真の自己を保持するために使われているのである。そのためには、客に好意を示し親しくなるだけでは不十分である。客は恋人とは違うからだ。好意にはけじめが必要なのである。ただし、サンダーズの議論は女性たちがつねに感情労働に成功しているかのように議論を進めている点に問題がある。また、私生活との関係で問題となるはずのセックスについても十分議論してはいない。

アベル〔Abel 2011〕は、ニュージーランドの調査を通じて、ワーカーたちがどのようにスティグマ化された仕事と自己との両立を可能にしているのかという問いに対し、感情労働の役割に注目して論じている。サンダーズと異なり、うまくいかない事例も提示しているが、セックスについては仕事の場合と異なり私生活ではコンドームを使用しないとといった事実と言及するだけで、境界維持の困難さを十分に議論しているとはいえない。

これらの論文が、公私の境界維持を感情労働が担うという共通の関心を持っているにもかかわらず、セックスについての議論が一面的に見えるのは、本稿で提示した官能労働という観点を有さないからと思われる。

8 レバーらは、ホアンのタイプ1に対応する街娼と客との間にはほとんど会話し合いがないと指摘し、「街娼はセックスを売っているだけ。私たちのように演じる必要はない。私たちは、男性と一緒にいたがっていると思わせなければならない」〔レバー & ドルニック 2004(2000): 142〕というコール・ガールの言葉を引用している。

官能労働とは、女性が快楽を感じる（あるいはそういったふりをする）行為で、感情労働と異なりセックスワークに特有の労働と考えることができる。女性が男性の働きかけによって「感じている」反応——喘ぎ声やオーガズム——を示すのも、セックスワークでは期待されているサービスである。この点については、コントゥラ [Kontula 2008] が考察を加えている。彼女によると、ワーカーも仕事に感じることがあるが、客への気遣いや状況の統御を優先することで快楽に身を投じることができない。他方で、これと矛盾しているようだがセックスワークでは主導権を握ることで自身の快楽に集中できるとも言っている。ワーカーも仕事に快楽を感じるというこのコントゥラの指摘に注目すると、仕事と私生活を分ける感情労働の1つが、顧客とのセックスで性的に感じないように感情を抑制するということであるとしたサンダーズの議論は一般性を欠くことになる。どちらも、自身のデータを一般化しすぎる傾向にあるというだけでなく、ワーカーの語りに快楽についての両極的な価値を認めようとしないところに問題があるように思われる。感情についてもそうだが、官能についてもワーカーはきわめて両価的感情を抱いていると想定できるため、本稿では、この点に注目して論を進めていくことにしたい。

III 日本の性産業

日本の性産業の特徴は、男性性器の女性性器への挿入という行為、いわゆる「本番」が、性産業全体のほんの一部を占めているにすぎないということである。本番がなければ、射精を目的としていても合法的とみなされる。本番以外の広義の性行為には、女性性器に触る、膣に指を入れる（指入れ）、キスをする、女性の口内や肛門に男性性器を挿入する（それぞれフェラ、アナル・ファック）、女性の手を使ったり（手こぎ）、太ももや乳房に性器を挟んだりする（それぞれ素股、パイずり）等、通常の性行為で行われると想定できる様々な行為が含まれる。このように、性産業は、本番系と非本番系に大きく分かれ、さらに後者が場合によって細かく分かれる。さらにオプション（SM、バイブなどの道具を使うか、制服着用などのコスプレをするか等の選択）によって、こうした行為以外のサービスを受けることが可能になる。

さて非本番系には店舗型と非店舗型があり、前者はさらに個室型と大部屋型に大きく分かれる。非店舗型は客あるいは店が指定したホテルや客が指定したホテル、あるいはその自宅に行く場合で、ホテル、デリバリーヘルス（以下デリヘル）、出張マッサージ等と呼ばれる。女性は店が用意した車で移動する。個室で非本番系の性的サービスを行う業務形態を一般にファッション・ヘルスといい、そこからヘルスや「・・・ヘル」という言葉が生まれた。

本番系店舗型はソープランド、旧遊郭のちょんのま、本番系非店舗型には街娼、店を通じてホテル等に行くホテルや本番デリヘル（本デリ）等がある。

本稿のインタビュー対象者たちが従事しているデリヘルについて説明しておく。本番系か非本番系かにかかわらず女性が店やそれ以外の場所で待機していると、客との待ち合わせ場所と時間が電話で指示される。移動は店の車を使う。1日に多いと5人の客をとる。

客に会うと、今日の時間や行為のオプション、できない行為等の確認をして、お金を受け取り、これを店に連絡する。場合によっては客がワーカーを気に入らないでチェンジを要求することがある。時間が経って終了すると、車を呼び、別の場所に移動する。これを勤務時間が終了するまで繰り返し、最後は自宅に送ってもらう。

ホテルより客の自宅に呼ばれるほうが緊張すると言う。まず、風呂やベッドは清潔かどうか気になる。盗撮されているかもしれないから、部屋はできるだけ暗くしてもらう。飲み物に催眠薬を入れられて熟睡中に裸体の写真を撮られたりしないように、警戒しなければならない。シャワーや風呂もできるだけ一緒に入る。

感情労働については、原則的に客および雇用者と過ごす時間が短いほど、感情労働を行う余地は少ない。非店舗型では、ワーカーが雇用者から感情労働についての教育を受けたり、管理を強いられたりする機会はほとんどない。ワーカー同士の交流も限られており、互いに情報交換をすることもないので彼女たちの感情労働は、客の接待を通じて個人的に洗練されていくと考えるべきであろう。

指名のシステムがある場合、ワーカーは以前に接客した客から指名を受けると、指名料を得ることができる。収入を安定させるには常連客からの指名を増やしたり、時には店を通さないで客と定期的に会うことが重要な戦術となる。しかし、指名をしてくれるリピーターや店外顧客もいつ消えるか分からないから、つねに新しい客をとってリピーターを増やす努力が必要である。その際重要なのが感情労働である。反対に、リピーターが望めないボッタクリ型の仕事では感情労働は重要ではない。

本稿では分析にあたって、本番を行うデリヘルに勤務するワーカー3人と非本番系デリヘルワーカー2人の区別をしていない。このため、本番系か非本番系かといった業務形態の相違が労働の過程にどのような影響を与えているのかについて論じることにはできない。接客に関係して相違があるとしたら、非本番系ワーカーは本番（挿入）をさせろという客のしつこい要求に、本番系ワーカーはコンドームなしでやらせろという要求に煩わされるという点である。男性客は、コンドームなしの本番を自分にとって一番気持ちがいいセックスと考え、それを要求するのが当然だと考えている節がある。このように、客が要求する行為は異なるにしても、そこに認められるやりとりには大きな違いはない。また、官能労働についての違いは挿入があるかどうかということになる。

ただ、こうした禁止行為は、私的なセックスと仕事でのセックスとを分ける効果的な方法でもあることに注目したい。すなわち、恋人であればセックスにコンドームは必要ではない、客の場合は必ずコンドームをつける、あるいはコンドームつきのオーラルセックスや手こきだけのサービスをしたりする、またキスをしないという形で差異化を図るのである。コンドームをつけるかどうか、キスをしないかどうかは性感染症との関係で説明されることが多いが、恋人との差異化を図るための重要な根拠と考えることも可能だ。

IV ワーカーたちの語り

本章では、筆者がインタビューしたワーカーの語りをもとに、セックスワークにおけ

る肉体労働や感情労働、官能労働をめぐる苦しみや葛藤等の諸問題を明らかにしたい。ワーカーが嫌がる客は様々である。身体の問題（性器の大きさ、機能不全、精力絶倫、遅漏、中折れ、体臭や口臭等）、性行為の問題（規定以外の行為の要求、器具の使用等）、コミュニケーションの問題（人として扱ってくれない等）、そしてそれ以外の問題（飲酒、薬害、支払いの遅延等）である。そのうち、ここでは肉体労働、感情労働、官能労働に関わる辛さや葛藤を取り上げたい。なお、語りの雰囲気을できるだけ残すようにしたが、繰り返しを省略する等して読みやすく加工している。「……」は中略、〔〕内の言葉は筆者による補足である。

1 肉体労働における葛藤

マリは本番系デリヘルに携わる 30 代の女性。彼女とのインタビューは一度だけだったが、多くのことを学んだ。

語り 1 < 5 本目くらいになると、もう痛い >

マリ > たぶん本番系が長いせいなのかもしれないんですけど、……やっぱりやりすぎちゃうとね、だんだん不感症になってくんですね。むしろなんか疲れてる時に例えば、1 本目（最初の客）と 5 本目〔5 人目の客〕だと違うじゃないですけど。5 本目くらいになると、もう痛いんですね、もちろん、〔客に向かって〕痛いとは言えないんで、あの、ゼリーとか〔膈内に〕仕込むんですけど、それでも痛い時があるんですよ。だから、むしろ、後の方だと苦痛。まあお金が介在するんですけどももちろん〔痛い〕言わないけど、まあ苦痛。

この語りには、肉体労働としてのセックスワークの辛さがよく表れている。若い頃なら可能だった数も、経歴が長いとからだがかたくなる。

つぎに紹介するアミも本番系非店舗で働くワーカーである。30 代半ばのデリヘル嬢で経歴は、18 歳から 17 年ほど、ずっとセックスワークに携わっている。

語り 2 < もうこれは入りません >

アミ > すごい、ちんこでかくて、もうこれは入りません、無理ですって言って。でも、ほんとに入れようとしてきたから、で、もう絶対痛くなると思って、あの、女性用コンドーム使いましょうって言って、そうしたら、ちょっと傷も浅いかなと思って、それで女性用コンドーム、自分がお風呂場で入れてきて準備できたよって言って、入れて終わり。早くイッてくれたからすごい助かった。

挿入を目的にお金を払ってくれた客の要求を断わるわけにはいかない。回数が多かったり、挿入してから射精までに時間がかかったり、性器が大きかったりすると、ワーカーの身体は苛まれる。辛いし痛いというのが本番系ワーカーに認められる共通の思いである。このため、ワーカーたちはゼリーを膈に塗ったり、女性用コンドーム⁹を装着したりして

からだを守ろうとする。これらは、ワーカーたちが自分の身体を守るために生み出した方法である。

すでに指摘したように、本番のないデリヘルでは本番が、本番のあるデリヘルではコンドームの装着が客との駆け引きで重要な争点となる。たまたまある会合で知り合った元セックスワーカーは、非本番系で働いていたが、客の挿入要求を断ることができなくて、3ヵ月で辞めたと言う。語り3は、マリが非本番系店舗で働いていた頃のエピソードである。

語り3＜入っちゃったら困る＞

マリ＞ヘルスとかだと素股をこう動かしている間〔と動かしてみせる、以下同じ〕に、腰の動きで大体分かるんですけど、こっそり事故を装って入れてこようとするバカがいるんですよ。「だからもう入んないんで」って言って、こうやって手でガーって押さえつけてやれば平気なんですけど、あの、手をこうやってガッてやっていると、手を振り払おうとする客がいるんです。「なんで押さえてんの」って、「だから、こうしないと入っちゃったら困るでしょ」って。「いや、どうしてどうしてだめなの」「だから、こーやって入っちゃ困るでしょ」「おれだよ」「だからなんだよ」って。ある程度気の強い子じゃないと、〔この仕事は〕できないですよ。

気が強くなければ客との交渉を有利に進めることはできない。キスをめぐるつぎのエピソードも、毅然とした態度の重要性を示している。

039

語り4＜ディープはダメっ＞

アミ＞キスしてきた時に避けたら、「ダメなの？」って聞かれて、カレシじゃないから、キスは口の中ダメって言って、ディープはダメって言って、あの、カワイイやつしかダメって、言って。いっつも断るから言うこと聞いてくれた。はっきり言った。

田中＞紳士やな。

アミ＞はっきり言ったからね。「えーっ」みたいな感じだと、押したらいけるって思われるから、ほんと絶対だめって言うほうがいいと思う。そんな感じでした。昨日は。

アミは性感染症を恐れているため客にキスをさせないと何度も明言していた。ここでカレシを持ち出してきているのは、客に納得させやすいと考えたからであろう。この場合客もまた自分の立場をわきまえているとも言える。

肉体労働に関わる辛さや客との葛藤は他にもたくさんあるが、本稿では、その一部を紹介するにとどめ、感情労働と官能労働についての分析に移りたい。

9 女性用コンドームは外陰部から子宮口までカバーする形で膣内装着するゴム製品。

2 感情労働をめぐる葛藤

客は射精だけを求めてやって来るわけではない。そこで肉体労働以外の労働が重要になってくる。サヤはインタビュー時 20 代で、22 の時から 3 年間非本番系デリヘルに勤めていた。

語り 5 <癒しを売る>

田中>まあ、何をあんたが売ってるのか、でもいいけど。

サヤ>うんと。癒し。

田中>で、向こうは、何で呼んでると思う。

サヤ>たぶん性欲の解消と癒しがあるんじゃないかなって、思うんですけど。その、性欲の解消だけだったら自分でやればいいじゃないですか。でも、それじゃ足りないものがあるから、〔女性を〕呼ぶわけで。

田中>うん。そうだね。だから、その時はやっぱり会話なのかね。手とか口だけで済むことなのか。

サヤ>だから、たぶん、そのたんたんと機械的にやってるんじゃないです。か。たぶん、恋人気分を味わいたいとか、それ以外のこと。手とか口とかだけで終わることじゃなくて、もっと、それ以上になんか精神的なものを求めているんじゃないかなっていうのは思いますけど。

040

サヤは別の場面で、フーズクで働いていると男に幻滅するのではないかという質問に、「そんなことはない、むしろいとおしさを感じる」と答えている。また水商売や一般職よりデリヘルのほうがよほど誇らしいとさえ述べている。

感情労働は大きく 2 つに分かれる。1 つは、客への好意を示して、相手を安心させ、客のひいきを得ることである。もう 1 つは、客に不安や不快感を与えないように、怒りや嫌悪等の否定的な感情を抑制することである。しかし、語り 6 が示唆するように、この 2 つの感情労働を分けることは困難だ。

語り 6 <奥さんになった気持ち>

アミ>で、……想像一生懸命するのは、この人、例えば呼んでくれるお客さんで、えっと、奥さんのいる人がいて、奥さんがこの人を愛したんだなって、どういう風に好きになったのか、この人のどこを好きになったのか、この人のからだのどこが好きになったのかな？って、一生懸命考えて、なんか奥さんになった気持ちになって。自分は奥さんだ、とのりうつるじゃないけど。

田中>でも、奥さん、〔彼本人じゃなくて彼の持ってくる〕給料を好きになっただけかもしれないけど。

アミ>いやいやいや〔そんなことはない〕、一生懸命情報聞いたりします。奥さんとラブラブだった時は、奥さんとどんなエッチしてたのかって。

田中>そういう話してくれる？

アミ＞してくれる。どんなエッチしてたとか、奥さんとイチャイチャする時、どんな感じって聞いたり。自分もやればできるかもっていう風に〔自分を〕勇気づけたり、奥さんでも、同じ女で、同じ女性で、奥さんにできたんだったら、私にもこの人を愛せるかもしれないって。分かる？ ああうけてる〔田中が笑っているから〕。そういう風に自分を盛り立てて、盛り上げて、ひょっとしたら、その奥さんは私だったのかもしれないじゃんて、いう風に〔自分に〕言い聞かせて……。

セックスワークにおける感情労働の最たるものは、客の恋人や妻の気持ちをみずから体現することにほかならない。アミは、一生懸命に客と妻とのセックスについて話を聞き、自分も妻になりきろうとする。「なりきること」をアミは「イタコになる」と表現する。「イタコみたい、イタコ呼んでくれ、みたいに、のりうつらないと、みたいな感じにずっと思う」と語る。

感情労働に必要なのは想像力であり、それで鼓舞された自分の気持ちと想像される「ラブラブな恋人生活」を相手の「魂に吹きこむ」必要がある。これは、まさに冒頭で紹介したホックシールドの語る感情労働そのものだろう。

ではなぜアミはそこまでして深層演技にこだわるのか。この問いに対し彼女は2つの回答をしてくれた。1つは、客を引きとどめてリピーターを作るためである。

語り7＜指名、指名＞

田中＞〔ラブラブになろうとするのは〕、何のためにやってるの、自分のため？

アミ＞指名、指名。

田中＞あ、指名か。まあ、そうだよな。

アミ＞お金。

田中＞まあ、確かにお金だけだよ、うん、そうか。ま、そう言われてみれば、そうなんかな。

アミ＞例えば、1カ月1回呼んでくれるお客さんが、1カ月に2回呼んでくれるには、どうしたらいいかっていうのを考えるんですよ……こっちがすごく頑張らないと。待っているだけでは2回にならないの、……私もすごく好きで会いたっていうのをアピールしないと、向こうも……〔そう〕思わない、思えない。金出してるだけ、みたいに思われたら、もう絶対1回が2回にならないから。

筆者は、「指名」や「お金」というあまりにストレートな言葉にやや失望を隠せないでいる。しかし、もう1つ別の理由をアミは用意していた。

語り8＜みんな恋人＞

田中＞〔昔のアミの発言を思い出しながら〕一時は恋愛感情持つことで、なんとかその〔セックスワークの〕辛さを乗りこえようとしたのではないの。

アミ＞〔お店の〕ママに言われて、エッチ好きになれって言われて、一生懸命好きに

なろうとしてた、今まで。あの、3月の大地震で忙しかった時。そうしないと、頭切り替えないとやれなかったから、お客さんがみんな恋人って思っても苦痛にならないから、嫌でも言い聞かせて、うん、〔そんな風にして〕いた時期があったけど……。

この語りで興味深いのは、アミは女性店長に指示されて「好きになろう」としたことである。それで知らない客とセックスをすることの苦痛が軽減する。彼は「恋人」だからだ。店の評判にもなり、客の数も増える。しかし、それは長くは続かない。なぜなら、深層演技が必ずしも成功するわけではない。そこには無理があり、あらたにストレスが生まれる。「終わったあとすごい疲れる。なんかもう、演じてたからずっと」ということなのである。

経済的安定と苦痛の軽減を目指して相手の恋人を演じる。しかし、後者は結局ストレスを生むことになる¹⁰。本稿の関心からいえば、アミは私生活と仕事の区別がつかなくなつて苦しむと解釈できるだろう。とすれば、今もなお、アミが客に対して「ラブラブ」を心がける理由は、お金のためでしかない。しかし、それもまた別の問題を引き起こす。親しくなればなったで、お金を取りにくくなるからだ。ここでも仕事と私生活の境界を維持することが困難となる。

語り9＜中学校の時に好きだった人＞

アミ＞労働っていうよりも、心を交流すると、人として見てしまつて、お金もらいにくくなる。……。

田中＞そうそうそう、……それは君がこないだも生フェラ〔コンドームなしのフェラチオ〕した理由、生フェラしたのはちょっと交流しちゃったからだよね。

アミ＞ちがう、交流してないけど、中学校の時に好きだった人に似てたから。

田中＞でも、それだけじゃなくって、今ここでコンドームつけちゃうと……。

アミ＞恋人みたいな関係、……。

田中＞そう、それが崩れちゃうと思ったわけだろ、まあ言えば。……やっぱり、〔心が〕通ってるわけやん、そんな時。

アミ＞そっか。それ通ってるって言うの。

田中＞そうやろ。

アミ＞ええ、そうなん？

田中＞そこでビジネスライクにできないわけやんか。

アミ＞戦略間違えたって、一瞬、すぐに後悔したんですけど。

アミは、心を許したわけではなく、戦略上の誤りだと述べている。それはどういう意味なのだろうか。続けて彼女の語りを追うことにしたい。

10 ワーカーのバーンアウト (burnout) については [Vanwesenbeeck 2005] が詳しい。

語り 10 <タイミングを逃がす>

田中>〔つけないのを〕やめた方がいいと思った？

アミ>〔いかにも仕事というふるまいを〕すごく嫌がる人だになっていうのを感じちゃって、それを考慮しすぎた結果、ゴムつけるタイミングを逃がした、やりにくいと思って。萎えちゃったら悪いなって、その人すごい萎えやすく、お酒も飲んでるし、勃起にくいって言うか、すぐにやっても、……中折れ〔射精前に男性性器が柔らかくなること〕みたいになっちゃうんですよ。で、そういうのもあったから、いろいろ要因が重なって、ナマでやっちゃったんですね。

語り 9で、アミはインタビュー前日、2回目になる客に生フェラをしたことに言及している。性感染用を恐れて通常なら決してしない生フェラをしたのは、中学時代に好きだった男子と顔が似ているからと述べているが、他方で語り 10で、その客とはベッドインする機会を逃して、そのままソファでフェラをするという展開になったこと、その流れで「コンドームをつけて」とは言い出せなかったと述べている。つまり、後者ではあくまで雰囲気壊さないようにという「戦略」の結果であり、それは間違いだったと後悔しているのである。したがって、彼女の視点から、生フェラは演技上の戦略の失敗であって、好きな男子に顔が似ていても、そこで心が通い生フェラを許したというわけでは必ずしもないのである。

語り 11 <向こうが調子乗ってくる>

アミ>お客さんを越えて交流したらやっぱ危ないんじゃないですか、危険。なんか、それを1回やると、向こうが調子乗ってくるじゃないですか。私、めっちゃキレられてばかりで、今まで、お客さんに「俺、俺はなんなんだ、お前のなんなんだ！」みたいな感じで〔キレられた〕。

感情を込めればこめるほど、客とワーカーという関係が問われることになり、客が不機嫌になる。感情労働を通じてリピーターを捕まえようとする戦略の矛盾である。しかし、アミはなお、セックスワークが他の仕事に比べて楽だと考えている。

語り 12 <この仕事のほうがマシ>

アミ>でも、私は、ふつうの仕事はできないです。だって、お客さんとだったら、嫌な人だったら1、2時間我慢すればいい、1日のうち。だけど、ふつうの会社とか勤めて、隣に嫌な奴いたり、嫌な上司とかだったら絶対耐えられないですよ。辞める〔とか〕明日行けないって言えないでしょ。

田中>それで、俺はいいと思うよ。

アミ>それで、この仕事のほうがマシだと思う。精神的にね。なんか、全然ちんこ舐めてるほうがマシ。嫌な人の顔色うかがうより。

ここで、上司や同僚が客と同じような位置づけになっているのが興味深い。本来ワーカーの上司に当たるのは店長、同僚に当たるのは仲間のワーカーであるはずだ。アミにとって店長も同僚もストレスの種にはならない。店長と接する機会もほとんどないからだ。しかし、上司や同僚と客との比較は、女性事務職員が顧客以外の人間に対しても感情労働を行わなければならないという職場の状況を図らずも伝えていると言える。当然、気を遣わなくてもいい客が一番ということになる。

感情労働は相手のためにだけするわけではない。少しでも相手との感情的な交流がなければ仕事は機械的になり、自身が機械になってしまう。語り 13 でアミが直面している状況は 24 以後の語りに通じるコミュニケーション不全である。

語り 13 <びたりとも動かず>

アミ>で、マグロ、ずっと。それで、まったく表情 1 つ変えず、マグロする。なんか、やりにくくない？ 笑いもせず、気持ちよさそうにもせず。何を喜ぶたいの、この人は？ みたいで分かりません。▽▽のお兄さんとかは、いちいち、褒めてくれる。気持ちいいよとか、それ上手だよとか、エッチだねとか、何か感想を言ってくれる。それだと、こっちも、一応それに乗っかる。この人はびたりとも動かず。

田中>外で〔昼間肉体労働して〕働いていたら、わりと、男性っぽい感じするけどな。そうじゃないのか。

アミ>エッチになると、なんか、無表情っていうか、無表情ってわけじゃないけど、ちょっとはニコニコするよ。私がニコっとしなさいっていう思いを込めて、ニコっとするから。だから、そういう時はニコってちょっとしてくれるけど、はにかんで。……うん、比較的早くイク。イッてくれる。あの、がんばれば。心を込めてやれば早くイク。伝わるみたい、そこは。

つぎに紹介するユリは 30 代で、非本番系のデリヘル専門で 5 年近い経歴がある。ここで彼女は、相手への働きかけ以上に、「自分の心を守るため」という印象深い言葉を発している。

語り 14 <心を遣わないと辛くてやってられない>

ユリ>よくからだは売っても心は売らないって言うけど、それは売ったことがない人がいうセリフなのかと思って〔ます〕。……たしかに心を売ってるわけではないんですけど、でもムチャクチャ遣ってるんですよ。心を遣いながら時間を売ってて、心を遣わないと辛くてやってられないから。心を守るためには心を遣うしかない。他に道はないですね。

感情労働は、公（仕事）と私（心）の区別を維持するためにも必要なのである。このように、感情労働と一言で言っても、「癒し」や好意を得るための相手への働きかけ、不快感の回避・抑制等のためだけではないことが分かる。それは仕事を単調にさせないこと――

自分自身が惨めになることを避け、心を守るためにも行われているのである。

最後に感情労働が不得意なマリの語りを紹介したい。彼女にとって、客は金であり、仕事は「作業」でしかない。美しく、ファッションセンスも抜群だが、リピーターがつかず、生活が安定しない。客に媚びることができないというのが彼女による説明である。1回で十分というのが客の思いなのであろう。

語り 15 <数ごなし>

マリ>最低〔1日〕7、8人つかないと。だから、その代わりやつつけですよ。数ごなしで。はいつぎ、終わったら、はいつぎって言う。どっちかっていうともう作業ですよね。

マリは、客に対して媚びるのが苦手と述べる。媚びたりするのは疲れるだけで、病むだけだと言う。こんな風に客に対して割り切っているように思われるマリだが、カレシができない。

語り 16 <職業病>

マリ>例えばワリカンとかでも私だめなんです。最初、ああこの人いい人そうだって思っても、もう、ワリカンねって言われると、ああダメ。

田中>ああほんと？基本的にはどんどんちゃんと奢って……。

マリ>……もらわないと、やなの。もうたぶんフーズク〔病〕。もう職業病なんでしょうけど、私タダで〔セックスを〕やるっていうのが嫌なんです。でも、カレシから金取ろうってわけにいかないじゃないですか。いやあ、なんかタダでやるんだったら、店で金もらってたほうがいいって、そういう考え方なんです。

田中>それいつから。いつからそんな風になったの。

マリ>私、結構昔っからそうですね。打算的なタイプなんでね、自分でほら冗談で、私はね、将来論吉をね、カレシにしたいのって言ってるくらい。もう錢ゲバなんで、執着心強いんです。だから、恋人欲しいと思わないんですよ。

マリの話で興味深いのは、私生活で恋人ができないし、できてもセックスが楽しめない。男にお金を使う気にならない、という点である。ここから、批判3における、セックスワークはセックスという本質的に私的なことを仕事にするという点で不自然であり、公私の区別が曖昧になって私生活（ここでは恋人とのセックス）に深刻な影響を与えるという指摘が正しいことになる。

アミは普通の仕事より楽と語りつつも、リピーターを獲得するために「ラブラブ」になることに努めている。また、「恋人」同士であると思い描いて、知らない男性とセックスをするという不自然さを克服しようとしている。しかし、こうした試みは一時的にうまくいってもストレスを増すだけである。「セックスは好きな相手とだけ」という考えを簡単に割り切ることはできないからだ。この結果ワーカーは、大いに悩むことになる。これは

楽しくもないのに客相手に笑顔をふりまかなければならない客室乗務員が直面しているのと同じ問題といえよう。しかし、演技の質は大幅に異なる。性的魅力のない男性客——「モテないからフーズクに来る」(アミ)——を前に一瞬にして恋愛ムードをかもしだし、裸になってことに当たるのは並大抵の演技ではない。心を守る必要が出てくるのである。その反動からか、恋人とはもっとストレートな関係を求め、「気遣いすること」(ユリ)もないし、「猫かぶり」(サヤ)もしない。しかし、他方でアミのようにストレスを抱え、ひいてはマリのように恋愛に価値を見出すことができなくなるワーカーも存在するのである。

3 官能労働をめぐる葛藤

セックスワークにおいては、感情労働が重要であり、かつ様々な葛藤も存在することが分かったが、表層であれ深層であれ、ワーカーの好意的な態度が演技ではないかという疑いを持ち、女性の素顔(ワーカーの素)を求めようとする客は少なくない。彼らにはワーカーの性反応やオーガズムにこそ彼女の真正性が現れるという考え方が認められる。男性がワーカーのオーガズムを求めるのは、からだは嘘をつかない、演技をしないという信念である。オーガズムこそが究極的なワーカーの真正性ということになる。ワーカーが(心を開かなくても)からだを開くのは男性のテクニック次第だ。からだが開けば、心も開いたのと同じ……。それはまた、テクニックやそれを自在に使える身体的能力の証明、すなわち客の男性性の証明にもなる。つまり、男性客が求める「素」は、一方で演技できるほど熟練していない素人っぽさの中に、他方で手練手管に長けたプロの女性がイッた時の状態の中にあると考えられている。前者は男性の能力に関係ないが、後者を得るには男性の能力が必要とされる。こう考えると、必ずしもワーカーが素人である必然性はなくなる。こうして、客の中には「自分ががんばるほうにすごい力を注いでいるみたいな方」(サヤ)も出てくる¹¹。本音では、「君にもイッてほしいとかいうヤツ、私大嫌い」(マリ)だが、ワーカーたちは客の幻想を実現すべく官能労働に励む。

ユリは、イクふりをすることに長けている。

語り 17 <ふりは自然にやっている>

田中>実際にはイッたことはある？

ユリ>すごく少ないですけど。いろいろ条件がそろわないとだめなんだけど、でも不可能ではないですね。

田中>あるいはふりをしなきゃならないとか、そういうことは？

ユリ>ふりはもう、呼吸をするように自然にやっているのです。負担ではないです。はじめの頃は、そこにすごく戸惑いを感じたりハードルがあったんですけど、今は割と自然にできるようになってきたので……。

11 1970年代に相次いで公刊された性産業についてのルポルタージュから、男たちは性欲を満たしにセックスワークにお金を払うだけでなく、彼女のオーガズムを求めて会いに来ることが分かる [田中 2010: 45-53]。

ある客はユリが何度かイッたふりをしたら、こう言った。「やっとホントの顔を見せてくれたね。」ユリはこの言葉を思い出してはつい笑ってしまう。そして、筆者にこう尋ねた。「ホントの顔って何なんでしょうね？」

演技は一般的と考えていいだろう。最低の感情労働しかできないマリはつぎのように述べる。

語り 18 <サービスの一環>

田中>あんまり性的に感じるというのは〔今までなかったですか〕。

マリ>もうお金、すべて金。金くれりゃあいくら演技するけど、でも、そこまでするね。だから、あと何分くらいとか、演技しながら頭で、あの早く〔イケッと思ってる〕。まあそれは私に限らず全部の〔女の〕こ、そうだと思うんですよ、早くイケみたいなの、うん。

田中>演技ってというのは、やっぱり感じてるような……。

マリ>ふりですよ。まあ、それはまあやっぱりサービスの一環でしてあげないと悪いんで、だからちょっと痛くても、「ここがイイの？」ってきかれたら、「うん」とか言うけど、「イテーんだよ本当は」みたいな、お前へったくそだなとか……。

マリは感じる演技を同僚の女性から学んだと言う。店舗で働いていた頃、隣の部屋から聞こえる激しい声。そこから彼女は学ぶことになる。

047

語り 19 <要はまあ演出>

マリ>やっぱり売れてるお姉さんっていうのが、まあすごい演技上手な方で、……だから、最初は〔ふりかどうか〕分かんなかったんですよ。〔こんなに喘いでて〕「えー」みたいな。でも、まあ、だれに対してもそういうほうだっていうのが分かってきて、「あー、そっか」、でもこれがこの人が売れる、やっぱそうしたほうが喜ぶっていうか、……要はまあ演出なわけで、そうしたほうが喜ぶからやるわけでしょ。そうして、まあ早くイッてくれるほうがこっちとしては楽じゃないですか、無駄に〔時間を〕使いたくないし。

アミも同じように演技に徹する。

語り 20 <全部ウソ>

アミ>演技では言いますよ。お客さんに、今イッたよ、気持ちよかった、こんなに気持ちよかったの、お客さんがはじめてだよって、全部ウソ言うんですよ。

ふりに徹することができれば、公私の区別が侵されることはない。問題は仕事でも本当に感じてしまう場合だ。アミはそれを客に知られるのを嫌う。「プライド」があるからだ。

語り 21 <プライド>

アミ>本来大好きな人にしてあげたい行為〔セックス〕を、最もやりたくない相手にするっていう認識しかなくって、〔そういう考えを持っている女性が〕大多数だと思う。それでちょっとでもお客さんとのエッチで、何か解放されたり、……自分にとってのメリットを見出したり……することは、自分を支えているものを崩壊させることになるんですよね。みんな、プライドあると思うんです。お客さんに感じさせられて、イカされる自分の話をするのは、もう耐え難いと思ってる。で、それは〔感じたとしても〕、お客さんにも知られたくないことなんです。

なぜ耐え難いのだろうか。それは、自分の好きでもない相手にオーガズムを感じるもののいらだちから来ていると解釈できる。自分を支えているのは、仕事は仕事でしかないという割りきりであろう。この割りきり——仕事と恋愛の境界——が性反応によって揺らぐのである。ここに公私のせめぎ合いを認めることができる。類似の語りを以下に紹介しておこう。

語り 22 <お客さんはやっぱり仕事>

アミ>あ、俺のエッチで、例えば〇〇ちゃんは感じてくれたんだって思ったら腹立つみたいな感じがあると思うんです。他の子もその葛藤はすごくあると思う。・・・お客さんとのセックスで、自分が開拓される話がしんどい話で、精神的に。あの、まったく真逆なことで支えてるから。

田中>そうなん？

アミ>……あの、別にお客さんでも感じていいし、お客さんでお金介したセックスでも、あ、このお客さんとのエッチ気持ちいいとか、このお客さんともっと快樂を楽しみたいとか、開発してあげたいな、私も開発してほしいなっていう関係は全然あり。ありだし、どんどんしてください、フーズクの活性化のために、って逆に頭ではもちろん思うし、賛成しますって言うけど……やっぱりだめ、ムリムリムリムリ。……お客さんはやっぱり、えっと仕事だし。

アミは、感じているふりをしたり、オーガズムの演技をしたりする。しかし、本当に感じている場合はそれを隠すのである。

アミと異なり、仕事でもからだの相称を重視するワーカーもいる。ここで再びユリに登場してもらうことにする。彼女によると、客の中にはからだが合う人がいる。それは、こちらに身を投げ出してくれるからだのことで、彼女は「柔らかなからだ」と表現している。セックスがうまいか下手かといった技巧とは関係ないと言う。

語り 23 <波長が割と近い>

ユリ>たぶんそのそういう性的なサービスを抜きにしても、人同士として波長が割と近い人。

田中＞それはどの辺で分かるの？

ユリ＞なんだろう？それはやっぱり言葉で会話していても分かるし、まあからだで会話していても私の言おうとしていること分かってくれているということが分かったり、相手の気持ちが自然にすっと入ってきたりするので、ギャップを感じて身構えるようなことや、恐怖を感じたりすることが少ないです。

官能労働で、ワーカーは仕事と私生活を区別している。しかし、その境界は必ずしも堅固なものではない。ユリのアプローチはオープンで、仕事でイクと得をした気分と述べている。まったく下手な客には怒りを感じることもある。しかし、その場合もできるだけ丁寧にふるまうように心がける。

語り 24 <いきなり押し倒して服を……>

田中＞じゃあ昨日は最初の人が〔午後〕8時半で。

ユリ＞8時半で2時間。で、それから新宿行って11時くらいから、そのお客さんで。その人がもうどうしようもなく変な人で、命からがら逃げてきて。だめだこりゃ〜って。

田中＞どんな人だったの？どんな風に変なお客さんだったの？

ユリ＞もう会話が全然通じないんですよ。こっちの言ってることを全然理解しようとしなないし。いきなり押し倒して服をばーっと脱がせて、いきなり〔性器を〕指で広げられて。……あーッ。わけ分かんない人ね。「怒ってる？」「怒ってる？」っていちいち聞いてくるんですよ。でも、もう致命的に女の扱いが分かってないの。

田中＞その人は要は、前〔に会った時〕言ってたじゃない。下手な人とうまくいかない人と両方いるって〔語り 23 <波長が割と近い>参照〕。

ユリ＞両方の才能を兼ね備えた才能にあふれた方でいらっしやって。……50はいつてると思うんですけど。50年生きてきてここまで知らずに来られるものかっていう。なんかね、こういう触り方するんですよ〔と筆者の腕を触る〕。で、「気持ちいい？」
「気持ちいい？」「イっちゃう？」みたいな。

田中＞いやだね。それね。

ユリ＞えー？って。返事に困ってたら、「あ、感じにくいタイプなんだねっ」て。

自分の「超絶技巧」に反応しないのはあくまでワーカーのせいなのだ。

もう1人似たような客を紹介しておく。ここでユリは我慢せずに「痛い」と述べている。

語り 25 <痛いんです>

ユリ＞その人は、とにかくプレイがすごく乱暴で。我慢できないくらい痛かったんで。で「痛いんです」って言ったら、怒っちゃって。

田中＞それは、何？指入れみたいなのが痛い？

ユリ>何もかもが痛い。

田中>うん、困った人だね、それはね。まあ男性から見れば、せっかく、リラックスなのか、自分の欲望を発散しようとしている時に、いろんなところでストップかけられちゃうんで、だんだん、イライラしてきたって感じだね。

ユリ>でしょうね。なんか下に見られた感じがするんでしょうね。ダメですっていうのは、主従関係の主から言うことなんで。しかし、かえすがえす痛かったんですよ。……〔客の〕自宅だったんだけど、たぶん、1人で住んでらっしゃる感じだったので。部屋の感じとかしても、女の人の感じとかが全然しない感じだったし。だから、根本的に分かってないと思う。

ユリ>その人、たぶん、これ1つつかむのに、ここまで〔筆者の腕をつかみながら〕つかむタイプなんですよ。それが、普通だと思ってる。その人は、すごく扱いが乱暴なうえに、すごく口下手。口下手っていうのは違うかな。言葉でコミュニケーション〔を〕したがない人だったので。話しかけてもあんまり返事しない。うーとか、あーとか言ったりする感じの人だったのでコミュニケーションがとれなくて、それがよくなかったですね。無理やりにでも、私がはじめからおしゃべりな女の子のキャラクターを作っていれば、もう少しなんとかなったかもしれない。

最後のくだりについては少し説明が必要である。ここで彼女が言おうとしているのは、はじめからもっとおしゃべりなキャラでこの客と接していたら、痛いだけの彼の行為を言葉でうまく拒否できていた、あるいは痛いと言う彼女の言葉に反発しないで、受けとめてくれていただろうということである。アベルは、ワーカーたちが仕事用のアイデンティティを持つことで、自己（素の自分）を保護することができると指摘しているが〔Abel 2011〕、それにとどまらず、様々なキャラを演じることで、ワーカーは客の言動を統御しようとしていることが語り 25 から明らかである。

しかし、ユリは「痛い」とは言っても絶対に怒らない。不機嫌だと思っていることを悟られないようにする。密室状態で客に逆ギレされたら怖いからだ。そのような怖れと怒りが交錯する気持ちを抑えながら「時間をやりすごす」。官能労働の最中に否定的な感情を抑制し、危険を回避しようとする感情労働を認めることができる。

4 限界と抵抗

本章の最後にワーカーが行う様々な労働が限界に達する事態について紹介したい。そこにワーカーたちの抵抗を認めることができる。

扱いが乱暴な客に対しては、当然反発が生まれる。サヤによると、お金払っているのだから何してもいいだろうという客はほとんどいなかったが、仁王立ちのまま両手で頭を押さえつけられフェラを強制させられた時は、「囁み切ってやろう」と思った。しかし、「やめてください」とは言えない。ただ、むかついたので、普通なら「カレシいません」と言うところ、「います」と答えて客をがっかりさせた。これは、ワーカーに対する客のファンタジーを打ち砕くささやかな抵抗といえよう。彼女は相手のやり方に反発して、感情労

働を一方的に降りたのである。ワーカーが面と向かって客に不満を述べたり怒りをぶつけたりすることはない。しかし、例外もある。

語り 26 <エッチが苦行>

アミ>ああ、はじめは〔楽しく〕エッチしてたんだけど、その人とのエッチは耐え難かったの。

田中>なんで？

アミ>すべてにおいて。お金をもらっていた時は、一生懸命演技してちゃんと盛りあげてたんだけど、お金をもらえなくなったらモチベーション下がって、私も嫌なとこばかり目についた。〔私を〕イカそうとしてばかり、長い時間、長時間。「もういつまでやってんの」っていうくらい指入れとか、ずっと〔私の性器を〕舐めて寝かさない。……もう触り方とかも嫌。胸とか触ってくるのも、……やらしい触り方。……自然に愛撫するとかじゃなくって、痴漢されてるみたいな触られ方するし、本当にあのとき地獄だった。マジでこんなにセックスワークって大変な仕事って思ったことないくらいそのお客さんで経験した。イク〔射精〕のが早かったと思うけど、……イクのが早い人って前戯で時間とろうとするでしょ。私が気持ちいいって思っ
てほしいと思うけど、演技するのもすごい疲れるし、もう本当にイカすのが命みたいな。……「もうイッたよ」って言っても、もう1回みたいな感じで。あの人ほどマ
グロになったことはない。耐えてるだけ。横になって早く終わって。なんか、イクふりもできないくらいもう疲れ切って、その人とのエッチが嫌で苦痛で。……もう声も出ない。……そのうち、……もう泣きそうな声になってくるから、もうほんと辛いんだなっていうのが〔相手にも〕分かって、自分とのエッチがここまで苦行になっているんだったら、もういいって気分に向こうもなって〔関係が〕終わった。

051

ここで、アミは、官能労働も感情労働も放棄している。放棄してやっと、彼に自分の思いを伝えることができたのである。ただし、支払いが十分でなかったということも忘れてはいけない。もし支払いがきちんとなされていたら、金のためと割り切ってアミはいやでも演技を続けていたであろう。

支払いがよくても我慢できない場合もある。15年以上様々なセックスワークに従事してきたマギーは一度だけ怒ったことがある。彼は50歳前後の客でまったく話が通じない。

語り 27 <もう嫌われてもいい>

マギー>そこで、自分がサービスしようとしたとしても、何も見られてないし。

田中>全然、やりとりが成立しない。

マギー>だれでもいいじゃんっていうか、自分が何をしてもいいじゃんっていうのって、むなしいので。やっぱりしんどい。べつに相手がいやな要求しても、それに応えて向こうが喜んだら、いやながらに、ああ仕事をしたなっていう感じはするわけですよ。でも、それさえもなかったとしたら、なんか、やだなと思う。いろんなムチャな

ことを言ってきて要求するのと違うしんどきなんですよ。……なんとかこう、相手から私が言ったことに向こうが応えさせるようにしようみたいになって〔思った〕、もう嫌われてもいいから、かなり強気に出ることにした。

ここまでの展開は、語り 13 <ぴたりとも動かず>とほぼ同じだ。コミュニケーションがとれない客に対し、なんとか最低の関係を持とうとする。ここで興味深いのは、マギーが、客が喜ぶなら嫌な行為をするほうが、コミュニケーションが取れないよりましだと述べていることだ。すでに指摘したように、最低のコミュニケーションが成立しないとこの仕事は辛い——「仕事をしたな」という達成感を得ることはできない。ただし、マギーは、語り 13 や 26 <エッチが苦行>のاميと違って感情労働を試みるのでも、やりとりを放棄するのでもなく、問いかける。

語り 28 <俺のことなんて見てない>

田中>なんか、聞いた？

マギー>いや、言ってくれない。……「お子さん、いらっしゃるんですか」とか「結婚してるんですか」とかって言ったら。……「みんな、俺のことなんて見てない」みたいなことを言ったんですよ。びっくりして、「えーっ」みたいな。「そうだ」、そう思ってたんで。……そこで〔相手のことが少し分かって〕自分は楽になった。この人かなり孤独。……そこで、ちょっとしんどくなくなったわけです。どういう人かが見えたから。

マギーが問いかけることで相手も少し心を開いたのである。しかし、マギーとこの客との関係はそこで終わらなかった。マギーはセックスの最中に彼を叩いたのである。

語り 29 <私が騎乗位になって>

マギー>そんなときは、私が騎乗位になって、そんなこと〔騎乗位〕を普段は全然しないんですけど、もう、押さえつける感じにして、面倒くさくて早くイケ、早くイッて私の仕事を終わらせろ的な感じの態度をとった。早くイッてくれないみたいな感じになって、もう怒りが抑えられない感じになり〔ました〕……。

田中>罵倒したわけ？

マギー>そんな、ひどい〔ことは言わなかった〕、本音は言わず「もう、ほら、早くイッて、もう疲れるし」と言って、それでなんか叩いたんですよ、ちょっとだけ。

田中>ほったか、なんか？

マギー>ほんと、ポチンっていう感じですけど、〔そうすると彼は〕「叩かれたー」って言ってました。〔そして、同時に射精をする〕「叩かれたとか言うなよ」って感じで。でも私にしてみたら、自分がやったことに対して反応がようやく返ってきたわけです。

客に手を出す等ということは本来あってはいけないことだ。相手がどう反応するかも分からない。しかし、マギーには耐えられなかった。アミのように感情労働を降りることで満足できる状態ではなかったのである。

以上、他の節と重なるところもあるが、本節ではとくにセックスワーカーが仕事の枠を越えて、客に反抗したりする事例を取り上げた。

V 考察

本稿では、セックスワークによる接客の実態に迫るために、肉体、感情、官能の3つの労働の過程を分析をする必要を主張した。以下では、冒頭で指摘した論点について、批判1、批判3、批判2の順に考察を加えたい。

1 感情労働と官能労働をめぐるエイジェンシー

1時間単位で働くデリヘル嬢にとって、セックスワークは肉体労働だけではない。本稿の事例から彼女たちが、肉体労働に加えいかに感情労働や官能労働に力を入れているかがよく理解できたはずである。これらの3つの労働は密接に関係している。官能労働が成功すると、肉体労働（男性の射精）もうまくいく。感情は、顔だけでなくしぐさにも出るし、不愉快な気持ちを意図的に肉体労働に反映させることは簡単だ。語り26<エッチが苦行>のマグロ状態や語り29<私が騎乗位になって>の騎乗位は、それまでの感情のやりとりの不発の結果だ。この点を確認したうえで、以下では感情労働と官能労働について考察したい。

複数のワーカーが、顧客との話が中心的で疑似恋愛感情を売りにする水商売には自分たちは向かないと言う。さらに、アミが語るように、一般の仕事より気楽であると考えているワーカーが4人いた。その理由は感情労働が楽だからというだけではない。非店舗型のデリヘルという彼女たちの仕事が、一般のサービス業と異なりほぼ自営に近い形をとっていて、組織的な訓練や監視がない点が指摘された。さらに、仕事時間についても自由が利き、稼ぎもよくかつ明瞭（日割の現金払い）である。ただし、言うまでもなく、これはセックスワーカー一般に当てはまるものではなく、拘束時間が長い場合もあるし、店舗型の場合においては労働管理が厳しく、ストレスも大きいと想定できる。ホアン [Hoang 2010, 2011] が指摘するように、セックスワークの感情労働は顧客の階層や労働形態の相違と密接に関係している。

ただ、ワーカーは、感情労働においてホアンが想定していた以上のことをしなければならない。好意を示せばいいわけではないのである。ほんとに好きでもないのに、過剰に好意を示すとワーカーの心身に異常が生じる。ストレスが増すのである（語り6<奥さんになった気持ち>参照）。同じことは官能労働にも当てはまる。また、リピーターを増やしたりするためではなく、自分の仕事を機械的な作業にしないために、つまり疎外感を軽減するためにも積極的な感情労働がなされているという点にも注目したい（語り13<ぴたりとも動かず>）。

コントウラ [Kontula 2008] が想定していたような、ワーカーは客のことを気にかけて自分の快楽に酔いしれることはできないといった禁欲主義的な語りを得ることはできなかった。一般に、女性を感じているふりをする事で男性は興奮してイキやすくなる。ふりをするのは恥ずかしくないし仕事の一部である。しかし、オーガズムを感じたり、それが知られたりすること自体を恥ずかしいと考える女性もいた(語り21<プライド>参照)。感情であれ官能であれ、演技にも限界があり客をわざと不愉快にするようなことを口走ったり(サヤの「カレシがいます」という発言)、マグロになったりする(語り26<エッチが苦行>)。しかし、一歩踏み込むとそれが相手の心を垣間見る機会にもなる(語り28<俺のことなんて見てない>)¹²。

先行研究に欠如していて、文化人類学的研究が貢献できるのはワーカーたちによる感情や官能をめぐる様々なやりとりについての分析であろう。やりとりの存在はとりもなおさず彼女たちのエイジェンシーの証明でもある。オーガズムについても、たとえ感じたとしても、それは相手に屈することを意味するのではなく、自身の積極的な行為で得たものだ、何も恥ずかしいことではないというユリの言葉がある¹³。ここにも官能をめぐるエイジェンシーの発露を認めることが可能であろう。こうしたエイジェンシーの存在は必ずしも労働条件の相違から生まれるものではない。それだけでは、感じることを恥ずかしく思うアミ(本番系デリヘル)とそうではないユリ(非本番系デリヘル)のオーガズムに対する態度の相違を説明できないからだ。その点を踏まえたうえで、微細な労働の過程におけるエイジェンシーの確認こそ、セックスワーカーを奴隷や無力な存在と一方的にみなそうとする批判1のワーカー観の再考を促す重要な契機となることを強調しておきたい。

2 セックスワークという仕事

批判3では、セックスワークにおける公私の区別を維持することの難しさが指摘されていた。金銭的な見返りが期待できないセックスを受け付けない——したがって快楽も望んでいないマリは、すでに公私の境界維持に失敗していると考えていいのだろうか。たしかに、その点を否定することはできない。「心を守らなければならない」というユリの声にも耳を傾けるべきであろう。10年以上にわたって多くのワーカーを見てきたマギーによると、彼女たちのほとんどが壊れていると言う。ここではそうした内部からの否定的な意見や実態を認めたうえで、公私の境界を維持することが困難な仕事は何もセックスワークに限らないことも指摘しておきたい。例えば感情労働の典型としてしばしば取り上げられる看護師や介護士においても、感情についての公私の区別を維持することが困難で、大きなストレスを生む。しかし、それをもって看護や介護が仕事ではないと断言することはできない¹⁴。セックスワークにおいてのみ3のような批判が出るのは、看護師や介護士には専門的な技術や知識があるが、ワーカーにはないからと考えるべきであろう。とすれば、批判3の公私の区別を維持できないという批判を突き詰めると、批判2のワーカーには専

12 この点については、[田中 2011] も参照。

13 類似の発言が [Chapkis 1997: 85] のインタビューにも認められる。

14 この点については、[Chapkis 1997: 78-79] も類似の指摘をしている。

専門的な知識は不要だという批判に吸収されることになるろう。

心身に与える悪い影響は、たんに顧客との関係に限らず、世間の偏見（悪いことをしている、倫理的に問題がある、犯罪だなど）に由来する場合もあろう。看護師や介護士たちが世間に認められているのに対し、セックスワーカーは認められていない存在である。当然自己肯定をするのも困難である。セックスワーカーを支えているのは高い収入と顧客からの感謝の言葉であると思われるが、その顧客が、チンポの先が乾かないうちにセックスワーカーに「君みたいなかわいい子がなんでこんな仕事をしているの？」、「若いうちに早く辞めた方がいいよ」など、自身が享受したばかりのサービスを否定する言葉を浴びせる。浴びせられた方としてはやってられない気分であろう。セックスワークという概念は、こうした状況に置かれているワーカーの自己肯定に貢献するために発明された言葉なのである。心身に異常を来すから仕事とみなすべきでないと考えるのではなく、そのような異常は仕事とみなすことでこそ軽減する、と考えるべきであろう。

ホックシールドは、感情労働が当然視されればされるほど「純粋な感情表現」[2000: 147] が求められると指摘していた。男性客がワーカーの官能労働に求めるのは、こうした純粋な官能表現すなわち「ホントの顔」である。同じことは感情労働についても当てはまる。こう考えると、セックスワークとは素人っぽく（とされる）官能表現や感情表現に触れられるところに最大の価値が求められる仕事と理解できる。客が求める「癒し」とは、性的欲望の充足ではなく、社会関係が演技（ふり）で固められている状況で、「純粋な」感情・官能表現に接すること——文字通り裸のつきあい——がセックスワークでは可能だということを意味しているのではないだろうか。女ならだれでもできる、必要なのは思い切りのよさだけだ、若くてきれいなら申し分ない [Chen 2008:110] といったワーカーへの無理解が、労働者としての彼女たちの地位を低めているのは明らかであるし、批判2に従えば、そんなものは仕事ではないということになる。しかし、客が「純粋な」感情・官能表現を求める限り、素人っぽくふるまうことや、すなおに好意を示したり、仕事であることを忘れて感じるふりをしたりする特殊な技能がますます求められるという事実に基づくべきではないだろうか。その意味でセックスワークとは、肉体だけでなく、客が求められる感情や官能の専門的労働者——癒しの専門家ととらえるべきであろう。そのような専門家としての努力は、本稿の事例から十分に理解できることだと思われる。それゆえ、批判3が指摘するように、しばしば公私の区別を維持することが難しい職業であるかもしれないとしても、批判2が想定していることと違って、それは看護や介護と同じくらい技能を要する仕事なのである。

VI おわりに

本稿は、セックスワークの労働の過程について論じることで、「最古の職業」の実態に迫り、それがどんな意味で仕事なのかを問おうとした。セックスが他者との親密な行為である限り、たんなる労働の過程としては理解できない要素もセックスワークには含まれる。それは、金銭に還元できない感情のほとばしりや、客との権力関係を越えて生まれる

ような偶発的な快楽である。こうした要素に注目することで、セックスワークの仕事としての豊かさ——仕事を越えた豊かさと言うべきかもしれないが——を確認することになる。それは、セックスワークが仕事に値しないということにはならないはずだ。セックスワークを仕事であると認めたうえで、さらにそこからはみ出る要素にセックスワークの魅力を見出すという方向にこそ、今後のセックスワーク研究の可能性が認められると思われる。本稿はそうした企てに向けてのささやかな第一歩として位置づけたい。

＜追記＞ 本稿は第46回文化人類学研究大会の分科会「客を叱りつける女たち——水商売・セックスワーク・感情労働」（2012年6月23日広島大学）で発表した「セックスワーカーが叱りつけるとき——感情労働の視点から」を大幅に追加修正したものである。当日コメンテーターを引き受けていただいた高橋絵里香さんと市野沢潤平さんに感謝する。その一部は第1回「セックス・ワーク・セミナー」（2012年10月27日京都大学人文科学研究所）で発表した。その後、2013年5月24日に京都人類学研究会で「SEX×感情労働×官能労働」（京都大学人文科学研究所）と題して発表した。コメンテーターは茶園敏美さんをお願いした。本稿は「現代日本社会におけるグローバル化する性産業についての文化人類学的研究」（田中雅一代表、2011-2013年度科学研究費挑戦的・萌芽研究）の成果の一部である。最後に、インタビューに快く応じてくれた5人のセックスワーカーに心から感謝の念を表したい。

056

＜参考文献＞

- 江原由美子編 1995 『フェミニズムの主張2 性の商品化』 勁草書房。
- 熊田陽子 2007 「性労働に従事する女性たちの民族誌的研究をめぐる覚書」『人間文化創成科学論叢』10: 329-337。
- 2009 「性労働者の「人格」再考——東京都市部の性風俗店における参与観察調査に基づいて」『社会人類学年報』35:57-79。
- 小谷野敦 2007 『日本売春史——遊行女婦からソープランドまで』 新潮社。
- ゼッターリッヒ、エルンスト 1962(1950) 『犯罪学』 植村秀三訳、みすず書房。
- 田崎英明編 1997 『売る身体／買う身体——セックスワーク論の射程』 青弓社。
- 田中雅一 2010 『癒しとイヤラシ——エロスの文化人類学』 筑摩書房。
- 2011 「運命的瞬間を求めて——フィールドワークと民族誌記述の時間」『時間の人類学——情動・自然・社会空間』西井涼子編、pp.115-140、世界思想社。
- 藤目ゆき 1997 『性の歴史学——公娼制度・墮胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ』 不二出版。
- ホックシールド、アーリー・R. 2000(1983) 『管理される心』 石川准・室伏亜希訳、世界思想社。
- 圓田浩二 2001 『誰が誰に何を売なのか？——援助交際にみる性・愛・コミュニケーション』 関西学院大学出版会。

レバー、ジャネット&ディーン・ドルニック 2004(2000) 「客、コール・ガール セックスと親密さを求めて」ロナルド・ワイツァー編『セックス・フォー・セール——売春・ポルノ・法規制・支援団体のフィールドワーク』松沢呉一監修、岸田美貴訳、ポット出版、pp.126-146。

- Abel, Gillian M. 2011 Different Stage, Different Performance: The Protective Strategy of Role Play on Emotional Health in Sex Work. *Social Science & Medicine* 72(7): 1177-1184.
- Chapkis, Wendy 1997 *Live Sex Acts: Women Performing Erotic Labor*. London: Routledge.
- Chen Mei-hua 2008 Sex and Work in Sex Work: Negotiating Intimacy and Commercial Sex among Taiwanese Sex Workers. In Stevi Jackson and Liu Jieyu with Woo Juhyun eds. *East Asian Sexualities: Modernity, Gender and New Sexual Cultures*, London: Zed Books, pp. 104-122.
- Hoang, Kimberly Kay 2010 Economies of Emotion, Familiarity, Fantasy, and Desire: Emotional Labor in Ho Chi Minh City's Sex Industry. *Sexualities* 13:255-272.
- 2011 "She's Not a Low-Class Dirty Girl!": Sex Work in Ho Chi Minh City, Vietnam. *Journal of Contemporary Ethnography* 40(4): 367-396.
- Kempadoo, Kamala & Jo Doezema eds. 1998 *Global Sex Workers: Rights, Resistance, and Redefinition*. London: Routledge.
- Kontula, Anna 2008 The Sex Worker and her Pleasure. *Current Sociology* 56(4): 605-620.
- Leigh, Carol 1997 Inventing Sex Work. In Jill Nagle ed. *Whores and other Feminists*. New York: Routledge, pp.225-231.
- O'Neill, Maggie 2001 *Prostitution and Feminism: Towards a Politics of Feeling*. Cambridge: Polity Press.
- Sanders, Teela 2005 'It's Just Acting': Sex Workers' Strategies for Capitalizing on Sexuality. *Gender, Work and Organization* 12(4): 319-342.
- Vanwesenbeeck, Ine 2005 Burnout among Female Indoor Sex Workers. *Archives of Sexual Behavior* 34(6): 627-639.

"You have finally shown your true self to me." Physical, Emotional and Erotic Labor in Japanese Female Sex Work.

Masakazu TANAKA

Keywords: sex work, emotional labour, erotic labour, sexuality, gender

This article aims to understand the nature of sex work in Japan in terms of physical, emotional and erotic labor. My analysis is based on interview data with five Japanese female sex workers. The word, “sex work,” was coined in the 1970’s to promote the idea that prostitution is a legitimate work of sexual service. Prostitution should be considered as the same kind of service work as you could find at a burger shop. Therefore, prostitution should be legalized and we should improve its working conditions.

There are three opinions against the above idea of sex work. The first one is that a sex worker is a victim of human trafficking. Then, legalizing prostitution would mean a justification of such a criminal act and a double standard of the patriarchal idea behind it. Secondly, prostitution is not proper work, because unlike other works, most of the customers prefer young untrained sex workers to old experienced ones. Third, prostitution is an inhuman work. By using sex, which is private in essence, for work, which is public, prostitution transgresses the boundary between public and private. It may have a lasting impact on the mind of prostitutes. In spite of their strong criticism, there are few academic publications dealing on interactions between sex workers and their customers.

In this article I try to demonstrate that these opinions are not tenable with my interview data. First, I show that sex work is divided into three labor modes. One is physical in a sense that a sex worker uses her body to please her customers. The second is emotional. The sex worker needs a certain number of regular customers in order to stabilize her income. She uses emotion to attract her customers. They come back to her because they feel happy with her and liked by her. This concept of emotional labor was invented by A. Hockshield, an American sociologist. She uses it as distinct from physical and intellectual labor. It is an essential part of service work. In addition I propose the third concept of erotic labor. It is labor regarding female orgasm. A female sex worker in Japan is often asked by her customer if she experiences orgasm with him or not. She tells him “yes” to assure him of his masculine supremacy in sex. It is a labor specific to sex service.

It has become clear that those sex workers I interviewed do not consider themselves as victims of patriarchy. They are more or less independent of their shop managers and customers. There is a space of negotiation with them. They have to develop skills for negotiation and protection of their minds and bodies. They must be skillful enough to pretend to be inexperienced. So even if the customers prefer young girls, it does not necessarily mean that they are unskilled laborers. Sex work may have a negative impact on the mind of the sex worker. Therefore, it goes, we should abolish any kind of sex work. My data show that some cannot develop normal love affair and regard sex being for money, not for care and pleasure. The activists for sex work do not deny its negative nature. However, they claim that this negative nature is overcome only by legalizing it, not by abolishing or criminalizing it. As far as it remains illegal, the sex worker must develop a skill to avoid risks, physical or psychological. Here again she needs to be professional.

To conclude, by referring to three types of labor modes, this article shows that sex work is a more complicated process than normally expected. The sex worker is not just a body to please her

やっとホントの顔を見せてくれたね！

customer. She has to be an agentic and knowledgeable being in order to control the interaction with him and protect herself.